

# 『孤高の人』を読む

米本 浩二

チェーホフらの翻訳で知られるロシア文学者、湯浅芳子（一八九六〜一九九〇）の瀬戸内寂聴による伝記だ。一九九七年、筑摩書房刊。二〇〇七年にちくま文庫。男装を好むレズビアンという芳子の人となり、宮本百合子らとの同棲、毒舌とこまやかな心遣い、資産家でケチ、などのエピソードとともに語られる。

寂聴が芳子を知ったのは『田村俊子』（一九六一年）の取材がきっかけという。「私をはじめて逢った頃は、湯浅さんは六十歳ほどだったから、まだまだ意気軒昂の時で、その舌鋒の鋭さも鬼気を帯びていた」。奇行伝とも呼びたいほど、エキセントリックな挿話が次から次へと出てくる。

寂聴が徳島の銘菓「小男鹿」を土産で持参した折、「何

が銘菓よ、鹿を殺して、その名前をつけるなんて、下品じゃないの」と芳子は怒る。動物の名をつけたものを嫌がるのなら、菜食主義かというところ、それでもない。

洋食店に行つてビフテキを注文する。芳子はひとくち食べたとたん、「こんな不味いもの出してよく一流だと威張れるなあ」とコック長やボーイ長を叱りつける。いまならカスターマーハラスメントと断罪されかねない理不尽な行動である。「どうしてこう威張れるのか不思議でならなかった」と寂聴は書く。

最上級の料理店で食事をし、祇園へゆき座敷に上がる。島原では太夫を呼ぶ。「太夫は真直湯浅さんの前に進み、専ら、湯浅さんの機嫌を取り結ぶのだ。湯浅さんを男と見

たてて、太夫と二人の固めの盃事などもあった」。ケタ外れの豪遊であるが、カネを払うのはいつも寂聴なのだ。

「男」として振る舞う芳子。寂聴は「病氣をして医者を呼んだ時、つい見てしまった湯浅さんの見るからに餅肌らしい白い胸と、清らかな型のいい乳房と、桜色をしたかわいらしい乳首は、まことに女そのものだった」と作家らしく書き留める。

田村俊子への恋。「俊子は芳子に遊びを教え、放蕩の快楽を覗かせはしたが、官能的に可愛がったり、わざと嫉妬させたり、その道でのテクニシャンだった」。

芳子と同棲した宮本（中條）百合子。「とかく女が女を愛するというようなことは、不自然な不合理な事で、そこからは光明的な何物も生まれはしないのです」と同性愛に虚無的な考えを抱いていた芳子を百合子の情熱が圧倒する。それなのに百合子は宮本顕治と結びつき、芳子を絶望させる。

芳子と親密な矢田津世子。芳子の知人の野上弥生子、網野菊、堀多恵子ら。芳子を書きながら寂聴の筆が他の人へ自然にスライドしていくのが面白い。岡本かの子、伊藤野枝、管野須賀子、金子文子らとつづく寂聴の評伝文学の源流を

みる思いがする。

二〇二五年夏、私は、映画監督の浜野佐知のトークをラジオで聴いた。「書く人、創る人」をみずからの映画の登場人物にすると語ったのが印象にのこった。浜野は、芳子と百合子の恋愛を描く『百合子、ダスヴィダーニヤ』を撮った人である。浜野のバイタリティーは寂聴を連想させる。寂聴も「書く人、創る人」を生涯追求したのだ。

寂聴は晩年、『苦海浄土』で知られる熊本の作家、石牟礼道子（一九二七～二〇一八）の伝記を書くかと思いついた。石牟礼の文学・思想的同志の渡辺京二との共闘を軸に据えようと構想した。しかし、石牟礼は既に亡くなっており、渡辺、寂聴とも体調を崩し、寂聴と渡辺の対面は実現しなかった。

渡辺は大杉栄らアナキスト（権力から自由であろうとする人）に深い関心を寄せており、大杉や野枝らアナキストを書き続けてきた寂聴に接して、アナキストにかなする新知見を得たかったのではないか。寂聴が道子を書きたがるのは、道子もアナキストだと寂聴が思っているからに相違なく、それなら道子の同伴者たる自分（渡辺）もアナキストなのか。それを確かめるには時間が足りなかった。